

ランチョンセミナー17 静脈血栓塞栓症のトピックス

小田代 敬太

公立学校共済組合 九州中央病院 循環器内科

肺血栓塞栓症（pulmonary embolism：PE）の原因として深部静脈血栓症（deep vein thrombosis：DVT）が深く関連しており、併せて静脈血栓塞栓症（venous thromboembolism：VTE）と呼ぶ。高齢化、生活習慣病の増加、診断率の向上などにより我が国でも確実に増加してきている。VTEの一つとしてエコノミークラス症候群が有名であるが、震災の際の車中泊でも生じやすく、2004年新潟県中越地震、2011年東北地方太平洋沖地震、2016年熊本地震では避難生活を送る人たちの中にVTEによる死亡者が報告されている。また、VTEは周術期や長期臥床などと関連して院内合併症として突然発症することがある。予防管理が行われるようになって以来その発症はある程度抑制できるようになったが、VTEは常にその存在を忘れてはならない疾患である。本症の診断にあたり、症状や身体初見は非特異的なものが多く、VTEの存在を疑うことが重要である。PTEによる死亡は、発症早期に多く、早期に適切に診断・治療されれば、その予後は比較的良いので、迅速かつ適切な診断と治療が必要である。DVTの診断はDダイマーとエコーがメインで、PEの診断は造影CTがメインとなる。VTEの予防と治療は、以前はヘパリンとワーファリンによる抗凝固療法が中心であったが、現在はDOACがメインに変化した。最近がん患者におけるVTが注目されている。VTEの発症原因が不明な患者では、後にがんが発見される可能性がある。近年では、がん治療の進歩によりがんサバイバーが増加し、経過観察期間にVTEを発症する例が増えている。VTEの背景疾患として、がんは重要であり、日常臨床においては、循環器医と腫瘍医との連携・協調が何よりも重要になってきた。再発率だけでなく、死亡率も高いがん関連VTE患者を、どこまでどのように介入するか、今後解決しなければならない大きな問題である。